

# 全海運所属組合の横顔

## 連載 第6回

# 九州地方海運組合連合会

## その12 長崎地区海運組合

### 【長崎地区海運組合の概要】

事務局 〒850-0035 長崎県長崎市元船町 6-6 松尾ビル 308号室

電話 095-822-0946 FAX 095-822-1711

JR長崎駅より徒歩10分

理事長 日向啓ひらき 日向海運(株)代表取締役社長

事務局員 森塚 梨沙

事務局員数 女性 1名

組合員数 登録運送事業者 9社

登録貸渡事業者 3社

届出運送事業者 1社

利用運送事業者 3社

合計 16社

所属船腹量 貨物船 14隻 24,054重量トン

舁・台船 1隻 355重量トン

プッシャー 5隻 1,435PS

バージ 5隻 18,253重量トン

合計 25隻 44,097重量トン総トンPS



日向啓 理事長

### 【地区組合事情】

#### 長崎の海運史

寛永16年(1639)のポルトガル船入港禁止から、嘉永7年(1854)の日米和親条約締結までの215年間にわたる徳川幕府の鎖国令の中で、長崎港は日本唯一の開港地であり、その恩恵を受けて貿易業、海運業、造船業、水産業が大いに栄えた。

元々ポルトガル、中国、オランダの貿易船は天文19年(1550)以来、日本初のキリシタン大名である肥前国彼杵郡大村武部郷さんじょうの三城城主大村純忠(1533~1587)から保護を受けて平戸に來航していたが、貿易地を元龜元年(1570)から長崎に移され、南蛮貿易の拠点として発展したのだった。その後、寛永13年(1636)、長崎に出島が完成すると、貿易拠点とともにポルトガル人とオランダ人の居住もここに隔離され、のちに中国人も市内の特定地域にのみ居住が許された。そして、同16年(1639)にポルトガル人が追放されたことで、オランダ人と中国人に貿易相手を



長崎地区海運組合所在地 (Yahoo! 地図)

限った鎖国が完成をみたのだった。

筑豊、唐津地方の歴史をみると、江戸時代から採掘した石炭が薪の代用として、個人消費されていたとされるが、長崎県下で初めて石炭が商用に掘り出されたのは宝栄2年（1705）頃で、長崎港外に浮かぶ高島であったと記録されている。高島には元々良質な石炭が埋蔵されており、19世紀初頭には既に商品価値があるものとして、組織的に石炭が採掘されていた。

高島の炭坑がさらに発展を遂げた背景には、スコットランド出身の商人トーマス・ブレイク・グラバー（1838～1911）の存在がある。佐賀藩と手を結んだグラバーは、近代的な採炭方式を導入し、日本初の蒸気機関を導入した堅坑「北溪井坑」を完成させ、これにより高島は質、量ともに国内有数の炭鉱へと発展している。

江戸時代、日本唯一の開港場だった長崎は、様々な産業の発展の拠点としても重要な場所だった。江戸幕府は安政2年（1855）、海軍創設を目的として長崎に海軍伝習所を開設したことに伴って、蒸気船を修理する施設建造の必要に迫られた幕府は、オランダ海軍機関士官ヘンドリック・ハルデス（1815～1871）らを招いて「長崎鑄鉄所」の創設を計画。文久元年（1861）3月、日本初の本格的な洋式工場「長崎製鐵所」を誕生させた。長崎製鐵所は建設中に長崎鑄鉄所から改称したものだ。ハルデスはまた、製鐵所の建物に使うため瓦職人を指導して、日本で初めて建物用煉瓦を製造したことでも知られている。

この長崎製鐵所の創設により、長崎の町中には全国に先駆けて、近代技術がお目見えした。中島川には日本で最初の鉄橋が架けられる一方、グラバーと小松帯刀（1835～1870／家老）や五代友厚（1836～1885）ら薩摩藩士によって、日本初の洋式近代的ドック小菅修船場が明治元年（1869）に完成した。このドックは、スコットランドから取り寄せたボイラー型蒸気機関を動力とする日本最古の装置で船を曳揚げる洋式スリップ・ドッグ型だった。レール上の船を載せる船架がソロバン状にみえたため、通称「ソロバンドック」の名で親しまれている。このドックは翌年、明治新政府が買収し長崎製鐵所が管理したが、のちの明治20年（1887）に三菱重工業の所有となり、現在に至っている。小菅修船場は、日本の近代造船所発祥の地ともいえる。

日米和親条約締結後、函館など長崎港以外の開港により船舶への燃料供給の必要性が高まり、幕府は安政4年（1857）に北海道白糠郡白糠町で、日本初の洋式坑内掘炭鉱を開発した。さらに、財政が逼迫していた諸藩が陣頭指揮をとって炭鉱を開発すると、石炭の需要は大きく増加したのだった。当時の製塩業者は、海水塩を蒸発させる燃料に松ヤニを利用していたが、価格が高騰して経営を圧迫し、低コストであった石炭が歓迎されたからだったが、長崎では明治維新後も多くの外国船が寄港し、燃料としての石炭の需要が高まり、石炭需要に拍車をかけたのだった。

また、近代的造船所や最初の汽船が製造されたのも長崎で、明治12年（1879）には新政府の直営で、現三菱重工業長崎造船所のルーツである「立神ドック」が完成し、修理だけでなく、新鉄船の建造も出来るようになった。さらに、明治22年（1889）に佐世保が政府から軍港に指定されたこともあって、長崎県内の石炭産業は飛躍的に増進した。



長崎地区海運組合が入居する松尾ビル



昭和初期の長崎港での石炭荷役（写真提供：ポケットブックス）

別の面からみると、炭鉱の歴史は石炭の需要拡大と歩調を合わせており、石炭産業は製鉄業、石炭化学工業、蒸気機関車の隆盛と共に興隆したが、最盛期には日本国内に 800 以上の炭鉱があった。そのうち九州の産炭地としては唐津炭田（佐賀県）、筑豊炭田（福岡県）、三池炭鉱（福岡県～熊本県）、粕屋炭田（福岡県）、天草炭田（熊本県）、そして長崎県下の炭鉱の西彼杵炭田と北松炭田があった。

西彼杵炭田は、長崎県西部の西彼杵半島と点在した海陸、島嶼炭鉱郡の炭田の総称で、ガス製造向けの弱粘結炭が産炭の主力だった。代表的な炭鉱として高島炭鉱、池島炭鉱、端島炭鉱、崎戸炭鉱、松島炭鉱などがあった。また、北松炭田は長崎県北部の北松浦半島一帯にあり、別名“佐世保炭田”とも呼ばれ、製鉄用の強粘結炭を産出していた。

平成 22 年の国勢調査によれば、日本には海岸線の長さ 100 m 以上の島が有人、無人を加えて 6,852 島あり、長崎県にはそのうち約 7 分の 1 の 971 島が属しており、日本で一番の多島県である。その長崎県では、かつて生活物資の島嶼間輸送に帆船、機帆船の活躍が目覚ましく、戦前戦後の石炭枢軸産業時代には関西以西、九州一円が長崎船籍の運炭船、坑木輸送船の出入りで賑わったと記されている。

元々長崎港を中心とした内航海運業者は、戦前戦後を通じて 600 社近く存在し、船腹も 600 隻を超えていたといわれている。長崎県下の主な船どころとしては島原半島、五島列島、壱岐などがある。長崎地区海運組合の組合員は長崎市内と諫早市、南島原市、西海と範囲が広い。それだけに情報連絡や会議日程などには、事前のよりキメ細かい対応が求められる。組合の運営は、年 2 回の理事会と九海連を通じた各種活動が主である。

### 【地区組合の概要】

長崎地区海運組合の設立は昭和 32 年（1957）12 月だが、昭和 27 年（1952）に長崎地区機帆船組合が設立されており、これが現組合の母体である。

長崎地区海運組合の令和元年（2019）10 月 1 日現在の組合員数は 24 社で創立当時の 25 分の 1 と大幅に減少している。業種別にみると登録運送事業者が 9 社、届出運送事業者が 1 社、貸渡事業者が 3 社、利用運送事業者が 3 社である。昭和 40 年代以降、石炭産業の陰りや景気後退、港湾の近代化、フェリーの進出などを背景に、内航事業者の活躍の場は徐々に狭まれたが、中でも石炭を主力にしていた一杯船主や生業的オーナーは転業、廃業が相次ぎ、船員不足問題、後継者難、運賃・用船料の低迷でその後も毎年数社が廃業に追い込まれている。

また、長崎地区海運組合の所属船腹は 24 隻、44,097 重量トンで、うち貨物船が 14 隻、24,054 重量トン、舢舨・台船が 1 隻、355 重量トン、バージが 5 隻、18,253 重量トン、プッシャーが 5 隻、1,435 重量トンとなっている。

長崎県下には、長崎地区海運組合の他に佐世保地区海運組合、壱岐島の壱岐地区海運組合と壱岐汽船海運組合もあるが、それぞれが遠隔地にあり、統合は困難だとされている。

長崎地区海運組合の理事長は日向啓日向海運(株)代表取締役社長。南島原市南有馬町で 3 代目の内航貸渡事業者で、内航一般貨物船資格の自動車専用船 1 隻を所有する他、外航貨物船 5 隻を所有している。組合事務局は森塚梨沙さんが女性ひとりで切り盛りしている。



長崎地区海運組合事務局。事務局員の森塚梨沙さん



現在の長崎港

## 【海にまつわる神社】

### 諏訪神社

諏訪神社は、鎮西大社と称えられる長崎の総氏神様である。主祭神は神諏訪大神と森崎大神で、諏訪大神は武神、厄除けの神の建御名方神、八坂刀売神。森崎大神は万物創成の神の伊邪那岐神、伊邪那美神。相殿神は住吉三神で海上安全、大漁満足の神の俵筒之男神、中筒之男神、底筒之男神。

長崎は戦国時代、イエズス会領となって他教を排斥したため、市内の社寺は破壊されることが多く、長崎市内に祀られていた諏訪、森崎、住吉の三社を寛永2年（1625）に肥前唐津の修験者であった青木賢清が長崎奉行長谷川権六、長崎代官の末次平蔵に願い出て、現在の松森神社の地である西山郷円山に再興し、長崎の守護神である産土神として造営したのが始まりとされるが、弘治元年（1555）に長崎織部亮為英が京都の諏訪神社の分霊を



諏訪神社の社殿（左）と海上安全の御守護札

現在の風頭山の麓に奉祀したのが始まりという説、東松浦郡浜玉町の諏訪神社を勧請した説もある。寛永9年（1632）に青木賢清が初代宮司になり、同11年（1634）から豪華絢爛、異国情緒たっぷり、現在も続く日本3大まつりのひとつである“長崎くんち”となり、毎年10月7～9日に開催されている。この秋の大祭では、「龍踊り」や「鯨の潮吹き」などの勇壮な奉納踊りが繰り広げられ、国の重要無形民俗文化財に指定されている。

諏訪神社は慶安元年（1648）、徳川幕府より朱印地を得て、現在地に鎮西無比の荘厳な社殿が造営された。安政4年（1857）火災で社殿のほとんどを焼失したが、孝明天皇の勅諭により、明治2年（1869）に約10年の歳月をかけて以前に勝る社殿が再建され、さらに昭和59年（1984）の御鎮座360年祭、平成6年（1994）の370年祭を記念して、2度の造営により現在の社殿が完成した。参道入口から大きな鳥居が構え、193段の石段を昇ると本殿がある。和洋中の文化が混在した長崎にあって、日本的な風情のある地域のひとつである。

#### 取材こぼれ話

諏訪神社に祀られている「森崎大神」は縁結びの神で、この参道の敷石に丸い形の「男石」と六角形の「女石」が埋め込まれており、これらの石を踏み、本殿正面にある「陰陽石」を踏んで参拝すると、縁結びの願いごとが叶うとされている。江戸時代に考え出された遊び心がある陰陽石である。

諏訪神社には、本殿右横にある「大黒天像」から数歩歩いた目の前に「恵美須天像」があり、男性は大黒天像から、女性は恵美寿天像から、それぞれ目を閉じて歩いて辿りつくと、恋愛成就するとされている。

また、諏訪神社の境内には、珍しい狛犬が鎮座し禁酒、禁煙、受験のすべり止めに効果がある「止め事成就狛犬」と呼ばれている。

さらに、諏訪神社には金を洗うと倍増するといわれ、安産にも効くと伝えられる「高麗犬井」と呼ばれる井戸がある。昔、遊女達が海が荒れて船乗りにもう一晚泊まってもらうことを願ったと伝えられる「願掛け狛犬」でもある。願をかける時は狛犬を回すとされている。また、境内の末社蛭子社の池の前にある狛犬は、心のトゲを抜いてくれるという「トゲ抜き狛犬」。正面参道の敷石に男石と女石が幾何学的な紋様で埋め込まれているところに、頭の皿に水を掛けて祈願するという「カップ狛犬」がある。

拝殿から諏訪公園へ抜けると、公園などの装飾用噴水としては日本で最古のものといわれる噴水があるので、ご覧になることをお奨めしたい。（米山）

